

令和 7 年度

業 務 () 設 計 書

桂見 2 号墳出土内行花文鏡復元品製作業務

鳥取市教育委員会文化財課

鳥 取 市

第1号内訳書

名称	項目	仕様	数量	単位	単価	金額	備考
桂見2号墳出土内行花文鏡復元品製作業務							
	型取り作業		1	式			
	成形作業		1	式			
	仕上げ作業		1	式			
	鑄造作業		1	式			
	表面研磨及び仕上げ作業		1	式			
	材料費		1	式			
小計							
資料借用費			1	式			
事務管理費			1	式			
消費税			10	%			
合計							

鳥取市

仕様書

1 業務名

桂見2号墳出土内行花文鏡復元品製作業務

2 履行場所

鳥取市教育委員会文化財課

3 履行期間

契約締結後から令和8年3月13日まで

4 業務内容

鳥取市が所蔵する桂見2号墳出土内行花文鏡を使用して、銅合金製の復元品を製作する。鑄造については銅・錫・鉛の合金とする。

【資料】

面径：20.2cm

材質：銅合金

【製作工程】

- (1) 鳥取市が所蔵する桂見2号墳出土内行花文鏡を借用する。
- (2) 作業前状況の写真を撮影する。
- (3) 借用した資料から錫箔やシリコン樹脂を使用して型取りを行う。
- (4) その型から樹脂成形品を製作する。不鮮明な文様部分やバリや鏽などの鑄造に不要な部分については修正を行い、これを鑄造原形とする。
- (5) 鑄造原形を用い、鑄造型を作成し、合金の金属比をもとに鑄造を行う。
- (6) 出来た鑄造品の細部を調整し完成とする。

5 その他

- ・作業にあたっては、借用する資料の毀損がないよう、注意すること。
- ・この仕様書に定めのないことのほか、詳細については発注者と打ち合わせて決定する。



桂見2号墳出土内行花文鏡

背面



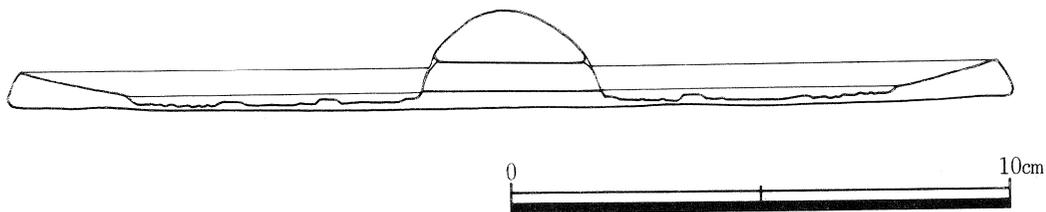
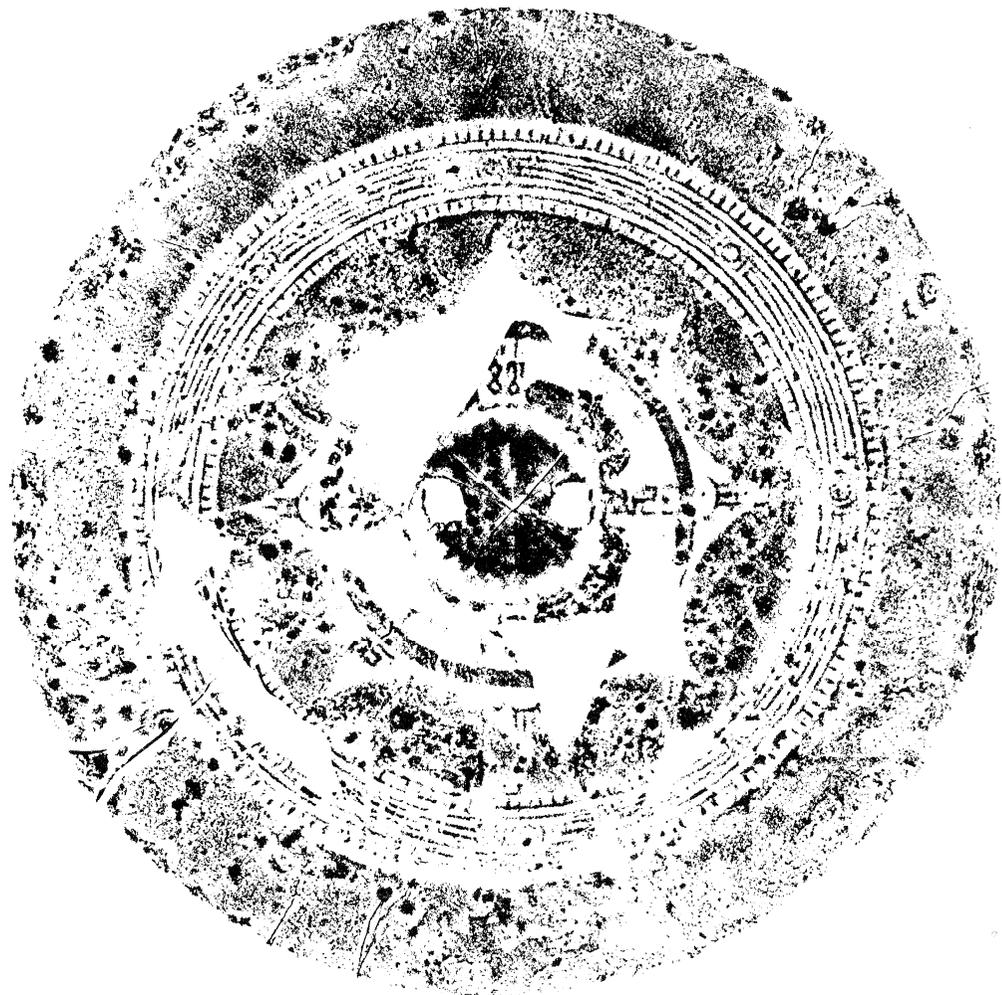
鏡面



側面

なった。樹皮を巻きつけた木質部に差し込んだように見えるが、たばねたものとも考えられる。残存長は4cm前後であるが、本来はもう少し長かったと考えられ、針先あるいは頭部を欠くものと思われる。

斜縁獣帯鏡(第72図)すでに発掘時には大きく3片に割れ、かつ一部を欠く。铸上りは良く、鏡背の文様も鮮明である。なお、鏡背を上面として出土している。



第73図 桂見墳墓群第2号墳第1主体出土内行花文鏡拓影

鈕は、径23.5mm、高さ9.5mmの円形で断面は不整な蒲鋒形を呈する。円形の鈕座の外には時計廻りに「天王日□」の銘と唐草文を配した圈帯があり、有節重弧文帯で囲む。欠損して不明の一字は「月」になるものと考えられる。内区主文は、6個の円座乳によって分割され、右向きに半肉彫りの仙人、禽獣を配する。二仙は対に置き、その間に一禽二獣を配す。この文様帯の外に13文字からなる銘帯があり、鑄で浮き上がり読みづらい文字もあるが、反時計廻り(左廻り)に「吾作明竟自有紀令人長命宜子」と読める。この銘帯の外を櫛歯文帯がめぐる。外区は一段高くなり、鋸歯文帯、列点を持つ複線波文帯、再び鋸歯文帯と巡り斜縁(半三角縁)で終る。2圈の鋸歯文は、いずれも外向きに铸出される。

この斜縁獣帯鏡は、面径146mm、厚さは内区銘帯で1.5mm外区複線波文帯で2.0mm、縁頂で7.5mmを測り、反りは1~2mmである。乳は径5~6mm、高さ2.5mm、乳座径は9.8mmである。保存処理後の重量は287gである。鏡面は、鑄で浮き上がっている部分もあるが、比較的よく保存され白銅色に光る。なお、この鏡は、後漢末の舶載鏡と考えられる。

内行花文鏡(73図)検出時の状況について前述したとおりである。大小およそ9片に割れており、大部分が白緑色のいわゆる青銅におおわれ遺存状態は良くない。

鈕は、径36mm、高さ16mmの円形で断面は不整の半円形を呈する。鈕座は四葉座で間に「長」「子」「孫」字を読むことができる。「宜」字を欠損しているが類例から、右廻りの「長宜子孫」銘になるものと思われる。外に平頂素圈が巡る。主文をなす内行花文(連弧文)は、8つの半円弧形をその名のとおりに内側に向けて配する。花文の間には、山形文と交互に文字が入るものと考えられ、山形文3と「石」の一字が認められる。他の内行花文鏡の例からすれば「寿如金石」あるいは「寿如石金」銘となるものと考えられる。花文の外側は、櫛歯文帯にはさまれた雲雷文帯(斜角雷文帯)が巡り、この中には2重の渦文を8個等間隔に配する。外縁は巾広無文で一段高くなっている。

面径は202mm、厚さは花文部で1.5mmを測る。外縁は幅23mm、厚さ7.0mmである。重量は855g(保存処理後)をはかる。中国後漢後期の製作になる舶載鏡と考えられる。

(2) 第2主体(第74図、図版36)

第2主体は墳頂東端部に位置する。遺構は最初に配石を確認し、その全体を検出したが、それに伴う土壌の検出面を得ることは困難であった。最終的には第13トレンチの掘り下げによって土壌の断面を確認した。その結果、本遺構は土壌縁辺に角礫を配した、いわゆる配石土壌墓であることが判明した。土壌は主軸をN-35°-Wにとり、長軸188cm・短軸61cm・深さ45cmを測り、断面は逆台形を呈する。角礫の大きさは50cm前後を最大にこぶし大まで大小不定であるが、おおむね長軸を土壌中心へ向け、端部を土壌掘り方縁辺に揃えるようにして並べられている。土壌内の遺物は全く検出することはできなかったが、配石の周辺で複合口縁をもつ口径20cmの甕(第76図1)の破片が出土している。《土層：①暗褐色砂質土 ②淡暗褐色砂質土 ③茶褐色砂質土(きめ細かい真砂粒を含む) ④~⑧第13トレンチ土層断面に準ずる》